

「信頼感」と価値観および行動に関する実証的研究

——全国世論調査から——

佐々木 正道

目 次

はじめに

1. 信頼感と生活の満足度
2. 信頼感と不安感
3. 信頼感と悩み事の相談相手
4. 信頼感と対人関係
5. 信頼感と連絡を取り合える人の数
6. 信頼感とインターネット利用
7. 信頼感と個人対公共の利益
8. 信頼感と地域の付き合い方
9. 信頼感と外国人の居住
おわりに——要約と結論

はじめに

ジンメル (Simmel) は「信頼は社会におけるもっとも重要な総合的力の一つである」(1950: 326)、そしてブラウ (Blau) は「信頼は安定した社会関係に欠くことができない」(1964: 99) と主張した。またゴレンビーウスキとマッコンキー (Golembiewski & McConkie) は「信頼ほど人間関係や集団行動にきわめて重要な影響を与える単一の“変数”はほかにない」(1975: 40) と明言している。しかし、一方でチュニース (Tonnie 1887) は「信頼の醸成は人々の強固な、対面によるゲマインシャフト的な関係を持つことによるのみ可能である」とその限界も指摘している。

「信頼」は1980年代以降主に欧米において、社会学をはじめ心理学、政治学、歴史学、経済学、人類学、マネジメントと組織研究に至る広い分野

で多くの研究が行われてきた。社会学では、信頼研究の創成期に現代社会における社会学理論の中心に「信頼」を位置づけた碩学ニコラス・ルーマン (Niklas Luhmann) の1979年出版の著書『Trust and Power (信頼と権力)』とバーナード・バーバー (Bernard Barber) の1983年出版の著書『The Logic and Limits of Trust (信頼の論理と限界)』を挙げることができる。

「信頼」は主にミクロとマクロの両レベルから研究が行われてきた (Luhmann 1979; Misztal 1996; Paxton 1999; Nootboom 2002 を参照)。ミクロレベルでは、①個人の性格特性 ②対人関係 ③社会的属性との関連についてであるが、②と③は主に成人後の生活経験から醸成される¹⁾ (Boyle & Bonacich 1970; Hardin 1996)。マクロレベルでは、コミュニティ (Alesina & Ferrara 2002) や国家の特色との関連についてである (Levi & Stoker 2000; Weatherford 1992 を参照)。

- ① 個人の性格特性については、アメリカの1950年代から1960年代にかけての研究において、信頼感は楽観的、博愛的、寛容的、社会的、利他的、そして相互協力を重視する性格特性に関連がある²⁾。それらは社会化³⁾によって生まれその後の人生においても継続するが、トラウマ的経験などによっては緩やかに変化することが明らかとなった (Erikson 1950; Rosenberg 1956, 1957; Allport 1961; Cattell 1965)。後にウスラーナー (Uslaner 1999, 2000, 2002) は、社会化による信頼感の

醸成についての研究を推し進めた。彼はその社会化については、主に親によって生まれ、自己管理ができ、経済的外的状況などの客観的要素より性格特性と感情などの個人的要素と密接に関連していると主張した。

- ② 対人関係では、対人関係ネットワーク（所謂ソーシャルネットワーク）に関する研究（Fukuyama 1995; Hearn 1997; Delhey & Newton 2003; Hardin 2006; Stolle et al. 2008 など）がある。
- ③ 社会的属性においては、社会階層の地位（Delhey & Newton 2003）、収入（Delhey & Newton 2003）のそれぞれ高いレベル層は信頼感が高く、年齢では高齢層は信頼感が高い（Alesina & la Ferrara 2000; Glaeser et al. 2000; Welch et al. 2007; Stolle et al. 2008）。学歴との関連については、高学歴層は信頼感が高い（La Porta et al. 1997; Putnam 2000; Uslaner 2002; Delhey & Newton 2005; Welch et al. 2007; Stolle et al. 2008）。性別については男性は女性より、結婚の有無については既婚者の方がより信頼感が高い（Glaeser et al. 2000: 816; Paxton 2007: 65）。

次に、価値観との関連で、パットナム（Putnam 2000）、ハーデン（Hardin 2002）、ウエルチ他（Welch et al. 2005）は、高信頼感の人々をより健康的、道徳的、幸福にし、向民主主義的考えを持つように仕向け、社会的支援を行う有益性があると述べている。パターソン（Patterson 1999: 190）は「不安と精神的不安定が不信感に明らかにつながっている」と結論づけた。

世界価値観調査（World Values Survey）ならびにアメリカの一般社会調査（The General Social Survey）によると、信頼感とは社会の中の勝者と敗者に関連していることが明らかになった。勝者とは、高い社会的・経済的・職業的地位、高い生活満足度や幸福感を得ている人々で信頼感が高い。敗者とは、低い学歴・低い社会的・経済的・職業的地位、低い生活満足度、離婚などの状況にある人々

で不信感がみられる（Orren 1997; Newton 1999: 173; Whiteley 1999: 40, 41; Patterson 1999; Putnam 2000; Stolle 2001; Uslaner 2002; Delhey & Newton 2003; Bjornskov 2003; Helliwell 2003）。パットナム（Putnam 2000: 138）は「実際すべての社会では、もっている者（haves）はもっていない者（have-nots）より信頼感が高い。なぜなら、もっている者は他人からより正直とみなされ尊敬を得ているからである。」と述べている。

他方、信頼感についてのマクロレベルの研究では、トップダウンのアプローチにより社会システムや中心となる歴史、社会制度、そして政治・経済などの状況や特質、特に信頼感を醸成する態度と行動を促す社会的・政治的制度に焦点を当てている。パットナム（Putnam 2000）およびハウスとウルフ（House & Wulf 1978）によると、小さな町や田舎の住民は、利他的で正直で信頼感が高い。他にもコミュニティに対する満足度や治安の度合いや市町村の規模が、信頼感と関連している研究などがある（Delhey & Newton 2003 を参照）。信頼感の国際比較で明らかになったことは、1) 民主主義国家は非民主主義国家より、2) 社会福祉が充実している国は充実していない国より、3) 政治権力を制御する制度が充実している国はしていない国より、4) 種々の社会的平等に関する要因の度合いが高い国は低い国より、信頼感が高いことである。国家レベルの比較研究としては、Newton 1999; Booth & Richard 2001; Delhey & Newton 2003, 2005; Paxton 2002, 2007; Realo et al. 2008; Zmerli & Newton 2008; Dietz et al. 2010; Sasaki & Marsh 2012; Sasaki 2019 などがある。ウエルチ他（Welch et al. 2005: 462）は「実際すべての研究では、信頼は個人、職場、組織、コミュニティ、そして国家にさえ有益な影響を及ぼす」と結論づけた。

本研究では、ミクロレベルの視点から欧米での前述の先行研究に言及し、我々が2017年に実施した全国規模の一般意識調査の質問票から信頼感に関連すると思われる質問項目を選び、信頼感と価

価値観および行動の関連性について検証を行う。その際、信頼感に関連するといわれている社会的属性（性別、年齢、学歴、社会階層、結婚の有無）（Putnam 2000; Uslaner 2002; Delhey & Newton 2003 を参照）との関連も検証する項目に加える。検証する項目は次の9項目である。

1. 信頼感と生活の満足度
2. 信頼感と不安感
3. 信頼感と悩み事の相談相手
4. 信頼感と対人関係
5. 信頼感と連絡を取り合える人の数
6. 信頼感とインターネット利用
7. 信頼感と個人対公共の利益
8. 信頼感と地域の付き合い方
9. 信頼感と外国人の居住

データ

一般社団法人 新情報センターに委託し、2017年9月に全国規模で実施した一般意識調査のデータを分析に使用する。この調査は日本学術振興会科学研究費（基盤（B）「情報化社会における「信頼感」の実証的研究」研究代表：佐々木正道）の助成によって実施された。

調査対象は18歳から79歳の男女、標本数は日本国籍を有する者の2,000、抽出方法は住民台帳による層化2段無作為抽出法（全国100地点（1地点20人））で、調査法は調査員による個別訪問留め置き法で、回収数は1,134（そのうち郵送返送は41）（回収率は56.7%）である。

方法

欧米における一般価値観調査（GSS）では信頼感の測定には、1つ、2つまたは3つの質問項目が用いられてきた。これらの3問は最初にローゼンバーグ（Rosenberg 1956）によって考案され、ミシガン大学社会科学研究所で3項目ローゼンバーグ尺度として定着し、この尺度は個人および幸福

感・安寧（well-being）の測定法として広く認識され（Wilkes 2011: 1596）、これまでも多くの意識調査⁴⁾で長年使用されてきた。しかし、3問のうち1問だけを使用した調査をもとにした論文⁵⁾もあるものの、その1問だけでは信頼感を測定するには不正確で、曖昧で、妥当性と信頼性を欠くなどとその問題点が指摘されてきた（Yamagishi et al. 1999; Schwarz 1999; Glaeser et al. 2000; Miller & Mitamura 2003; Reeskens & Hooghe 2008; Yoshino 2015）。

また、パックストン（Paxton 1999: 105）は、信頼感を多面的に捉える必要性を説き、スミス（Smith 1988）⁶⁾は国際比較をする上で、尺度は1問または2問ではなく少なくとも3問が必要であると述べ、そうすることによって信頼感の理論的概念を考慮した優れた尺度となる（Bjornskov 2006: 3）と主張した。

本研究では3問（問1～3）を信頼感尺度項目として分析に用いる。なお、以下のすべての問いに示された%とNは、本研究で用いた調査データの分析の結果得た回答の頻度と数である。

問1 たいていの人は、他人の役にたとうとして
いると思いますか、それとも自分のことだけ
を考えていると思いますか。次の中からあて
はまる番号に**1つだけ**○をつけてください。

	%	N
1 他人の役にたとうとしている	29.4	337
2 自分のことだけを考えている	36.8	422
3 その他（具体的に）	6.2	71
4 わからない	27.6	316
	100.0	1,146

問2 他人は、機会があれば、あなたを利用しよ
うとしていますか、それともそんな
ことはないと思いますか。次の中からあては
まる番号に**1つだけ**○をつけてください。

		%	N
1	他人は機会があれば自分を利用しようと思っていると思う	25.4	291
2	そんなことはないと思う	45.5	521
3	その他（具体的に）	4.2	48
4	わからない	25.0	286
		100.0	1,146

問3 あなたは、たいていの人は信頼できると思いますか、それとも、用心するにこしたことはないと思いますか。あてはまる番号に**1つだけ**○をつけてください。

		%	N
1	信頼できる	17.1	196
2	用心するにこしたことはない	70.3	806
3	その他（具体的に）	3.3	38
4	わからない	9.2	106
		100.0	1,146

すべての分析にはコレスポネン分析（以下、分析と略す）を使用する。この手法は、社会調査などでカテゴリカルなデータを伴ったクロス集計表分析に役立ち、分析結果を多次元的空間において、回答項目間の相対的關係の関連の強いカテゴリは近く、弱いカテゴリは遠く離れて布置し、データについて全体的に解釈できる統計的手法である（Greenacre & Blasius 1994; Greenacre 2004 を参照）。社会学の碩学ピエール・ブルデュー（Pierre Bourdieu）が好んで使用したのでブルデューの統計的手法と呼ぶこともある（Le Roux & Rouanet 2010: 4）。

分析結果

本研究では、信頼感尺度としてのこれら3問と9項目（問4～12）の質問を関連させて分析を行った。なお信頼感尺度項目の回答において、「その他」と「わからない」は選択肢としては用意されているが、9項目の質問の回答と同様に、それらをすべて分析から除外した（その理由については Le Roux & Rouanet 2010: 62 を参照）。また回答の割合が5%以下の選択肢もすべて分析から除外し

た（その理由についても Le Roux & Rouanet 2010: 61-62 を参照）。

1. 信頼感と生活の満足度

高信頼感は生活満足度と関連しているという先行研究があり、ガージウロとアータグ（Gargiulo & Ertug 2006; 172）は「信頼感と満足度の関連は信頼の結果についての研究において最も強固に確立された結果である。」と述べている。

問4 あなたの生活についてお聞きします。ひとくちにいて、あなたは今の生活に満足していますか、それとも不満がありますか。次の中からあなたのお気持ちに近いものの番号に**1つだけ**○をつけてください。

		%	N
1	満足している	18.9	216
2	どちらかといえば満足している	54.3	622
3	どちらかといえば不満だ	21.4	245
4	不満だ	5.4	62
		100.0	1,145

分析結果の布置図を図1に示す。なお、図1以下のすべての図において問1～3の回答選択肢については次の記号を用いる。

Q1(+) = 他人の役にたとうとしている

Q1(-) = 自分のことだけを考えている

Q2(+) = そんなことはないと思う

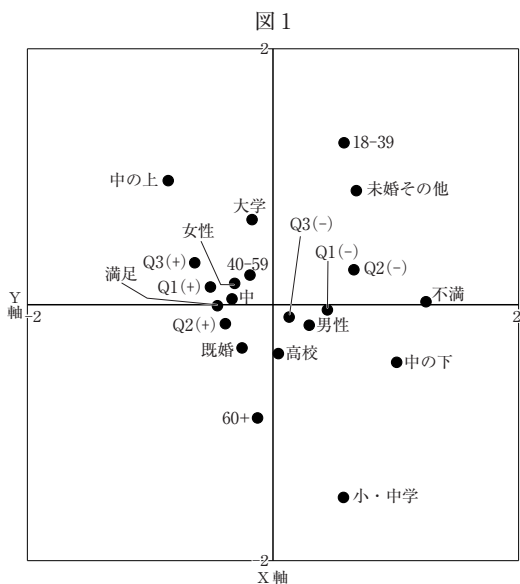
Q2(-) = 他人は機会があれば自分を利用しようとしていると思う

Q3(+) = 信頼できる

Q3(-) = 用心するにこしたことはない

同様にすべての図において X-axis (X 軸) と Y-axis (Y 軸) の値は相対的であり、符号は質問項目の意味と無関係である（Le Roux & Rouanet 2010: 38 を参照）。

図1では信頼感尺度項目の回答は原点の左側に肯定的回答が、右側に否定的回答が、それぞれま



まとまりを〈高信頼感クラスター〉・〈低信頼感クラスター〉と命名して使用する。原点の左側に「満足」、右側に「不満足」が布置している。この図の関連項目の布置をクラスター別にまとめると表1のようになる。

表1

	満足度	性別	年齢	学歴	社会階層	結婚の有無
高信頼感クラスター	満足	女性	40-59, 60+	大学	中, 中の上	既婚
低信頼感クラスター	不満足	男性	18-39	小・中, 高校	中の下	未婚その他

この表から〈高信頼感〉は満足で、女性、中・高年層、高学歴、中流以上、既婚者に多くみられ、〈低信頼感〉は不満足で、男性、若年層、低・中学歴、中流未満、未婚その他に多くみられる。よって、先行研究は本研究においても支持された。

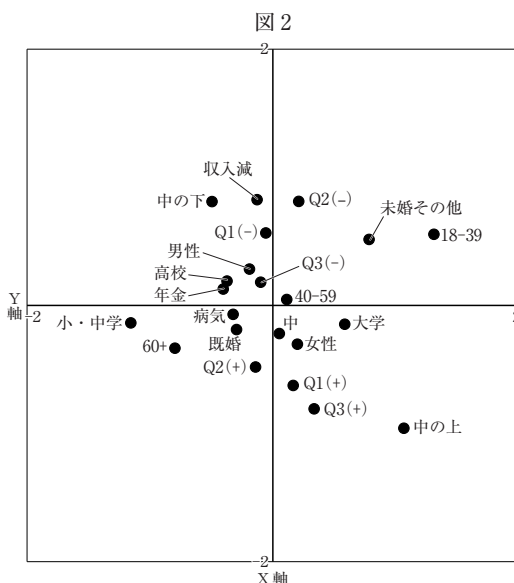
2. 信頼感と不安感

問5 あなたは、自分自身やご家族のことで、不安を感じていることはありますか。次の中から特に不安を感じていることの番号に3つまで○をつけてください。

	%	N
1 病気など健康の問題	62.5	717
2 年金など老後の経済問題	45.1	517
3 収入減など家計の問題	28.9	332
4 地震や台風などの自然災害に遭うこと	24.8	284
5 家族の介護	21.3	244
6 子どもの教育	13.9	160
7 戦争	10.4	119
8 就職・失業など仕事の問題	9.8	112
9 交通事故	7.4	85
10 犯罪やテロ事件	7.0	80
11 原子力施設の事故	6.0	69
12 特にない	5.8	67
13 食品の安全性	5.1	58
14 プライバシーを侵害されること	4.4	50
15 火災の被害に遭うこと	2.6	30
16 公害や環境汚染	1.5	17
17 医療ミス	1.4	16
18 その他（具体的に)	1.6	18
		2,975

分析には回答割合の多い上位3つまでを使用した。分析結果を布置図2に示す。

図2では信頼感尺度項目の回答は、原点の上側に否定的回答が、下側に肯定的回答が、それぞれ布置している。「年金」と「収入減」は原点の上側に「病気」は下側に布置している。この図の関連



項目の布置をクラスター別にまとめると表2のようになる。

表2

	不安に感じていること	性別	年齢	学歴	社会階層	結婚の有無
高信頼感クラスター	病気	女性	60+	小, 中, 大学	中, 中の上	既婚
低信頼感クラスター	年金, 収入減	男性	18-39, 40-59	高校	中の下	未婚その他

この表から不安に感じていることは、〈高信頼感〉では「病気」で、女性、高年層、低と高学歴、中流以上、既婚者に多くみられ、〈低信頼感〉では「年金」と「収入減」で、男性、若・中年層、中学歴、中流未満、未婚その他に多くみられることが読み取れる。

3. 信頼感と悩み事の相談相手

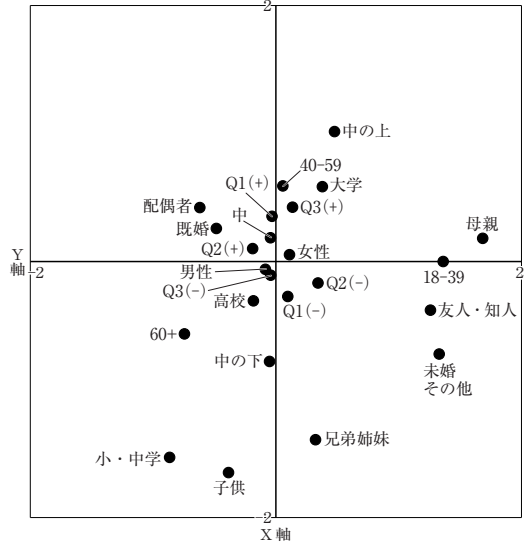
問6 あなたは悩み事や重大な相談事を、まずどなたに相談していますか、あるいは、すると 思いますか。次の中からあてはまる番号に **1** つだけ○をつけてください。

	%	N
1 配偶者（夫や妻）やパートナー	56.2	643
2 母親	10.8	124
3 (学校, 近所の) 友人・知人	7.9	90
4 子ども (子の配偶者を含む)	7.0	80
5 兄弟姉妹	5.1	58
6 相談できる人がいない	2.9	33
7 父親	2.1	24
8 職場の同僚	2.0	23
9 その他の家族や親戚	1.8	21
10 恋人・婚約者	1.7	20
11 職場の上司	0.3	4
12 電話やインターネットを使って匿名で相談できる場所	0.3	4
13 僧侶, 教師・神父	0.1	1
14 その他 (具体的に)	1.7	20
	100.0	1,145

分析結果を布置図3に示す。

図3では、信頼感尺度項目の回答は原点の上側に肯定的回答が、下側に否定的回答が、それぞれ布置している。「配偶者やパートナー」と「母親」

図3



は原点の上側に、「(学校, 近所の) 友人・知人」, 「兄弟姉妹」, 「子供 (子の配偶者を含む)」は下側に布置している。この図の関連項目の布置をクラスター別にまとめると表3のようになる。

表3

	悩み事の相談相手	性別	年齢	学歴	社会階層	結婚の有無
高信頼感クラスター	配偶者やパートナー, 母親	女性	18-39, 40-59	大学	中, 中の上	既婚
低信頼感クラスター	兄弟姉妹, 子供, 友人・知人	男性	60+	小, 中, 高校	中の下	未婚その他

この表から悩み事の相談相手は、〈高信頼感〉では「配偶者やパートナー」と「母親」で、女性、若・中年層・高学歴、中流以上、既婚者に多くみられ、〈低信頼感〉では「兄弟姉妹」, 「子供 (子の配偶者を含む)」, 「友人・知人」で、男性、高年層、低と中学歴、中流未満、未婚その他に多くみられることが読み取れる。

4. 信頼感と対人関係

対人関係を基本とする社会関係資本 (social

capital) が、信頼感と関連が深いことについては多くの研究で指摘されてきた (Putnam 1993, 2000; Brehm & Rahn 1997; Portes 1998; Welch et al. 2005; Hardin 2006 を参照)。ハーデン (Hardin 2002)、ハーン (Hearn 1997)、フクヤマ (Fukuyama 1995) は、人々は対人関係ネットワーク (所謂ソーシャルネットワーク) を通して、互酬性、正直、義務、協力、确实性、利他性にする社会的美德を学ぶと主張している。コールマン (Coleman 1988) も人々に信頼感があると相互扶助、互酬性、連帯性が生じる機会が多くなるとしている。ハーン (Hearn 1997) は「人々は、家族、隣人、友人の身近な人々から信頼することを学ぶと、それを第2次集団へ広げていくことができる」と述べている。この対人関係との関連性について検証するため、次の問7が分析に用いられた。

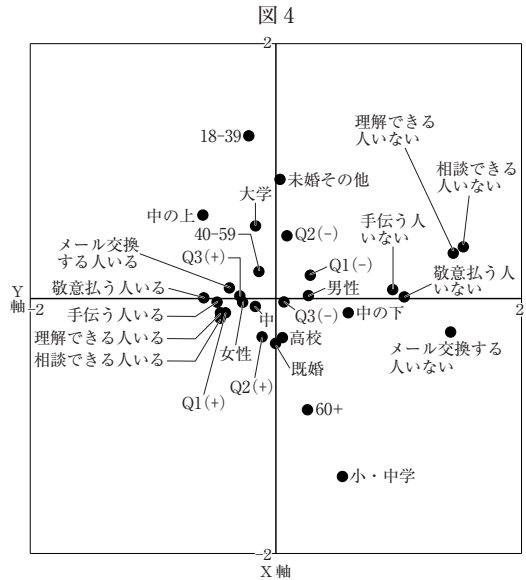
問7 あなたのご家族も含めて、あなたの周りには、次にあげるような人がどの程度いらっしゃいますか。

a～eのそれぞれについて、あてはまる番号に1つだけ○をつけてください。

	たくさん いる % (N)	まあまあ いる % (N)	ひとり だけ いる % (N)	特に いない % (N)	% (N)
a. 物や金銭を貸してくれたり、手伝ってくれる人	4.5 (51)	61.7 (704)	10.5 (120)	23.3 (266)	100 (1,141)
b. あなたの現在の気持ちや状態を理解してくれる人	6.8 (78)	69.1 (791)	12.6 (144)	11.5 (132)	100 (1,145)
c. 気軽に電話したり、会ったりして相談できる人	8.6 (98)	70.0 (801)	9.5 (109)	12.0 (137)	100 (1,145)
d. あなたのことを高く評価していたり、敬意を払ってくれたりする人	5.5 (63)	58.1 (662)	8.9 (101)	27.5 (313)	100 (1,139)
e. 気軽にメールを交換できる人	13.7 (156)	65.0 (741)	5.3 (60)	16.1 (183)	100 (1,140)

分析結果を布置図4に示す。

図4では信頼感尺度項目の回答は原点の左側に肯定的回答が、右側に否定的回答が、それぞれ布



置している。つまり、回答項目の「有」は原点の左側に、「無」が右側に布置している。この図の関連項目の布置をクラスター別にまとめると表4のようになる。

表4

	回答項目 a, b, c, d, e* の有無	性別	年齢	学歴	社会 階層	結婚の 有無
高信頼感 クラスター	有	女性	18-39, 40-59	大学	中, 中の上	既婚
低信頼感 クラスター	無	男性	60+	小・中, 高校	中の下	未婚 その他

- * a. 物や金銭を貸してくれたり、手伝ってくれる人
- b. 現在の気持ちや状態を理解してくれる人
- c. 気軽に電話したり、会ったりして相談できる人
- d. 高く評価していたり、敬意を払ってくれたりする人
- e. 気軽にメールを交換できる人

この表から〈高信頼感〉は、物質・精神面でサポートしてくれたり、対面・非対面コミュニケーションできる人が周りにいて、女性、若・中年層、高学歴、中流以上、既婚者に多くみられる。〈低信頼感〉は、それらの人が周りにおらず、男性、高年齢層、低・中学歴、中流未満、未婚その他に多くみられることが読み取れる。この結果は、前出のパットナム (Putnam 2000) の主張「実際すべての

社会では、もっている者 (haves) はもっていない者 (have-nots) より信頼感が高い」を支持する。

5. 信頼感と連絡を取り合える人の数

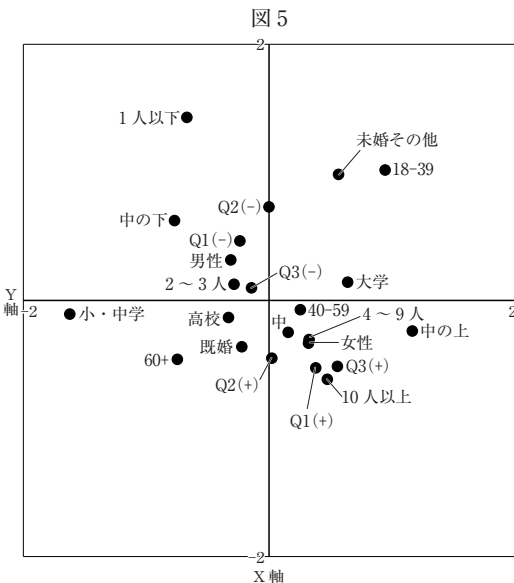
問8 あなたは、同居のご家族以外で、個人的に親しく、よく話をしたり連絡を取り合ったりする人が、何人くらいいらっしゃいますか。

	%	N
1人もいない	5.3	61
1人	4.2	48
2～3人	38.7	443
4～9人	38.8	445
10～14人	8.7	100
15～19人	1.5	17
20人以上	2.8	32
	100.0	1,146

回答の「1人もいない」, 「1人」, ならびに「15人～19人」, 「20人以上」は割合がかなり少ないので、それらは「1人以下」, 「2～3人」, 「4～9人」と「10人以上」として分析を行った。

分析結果を布置図5に示す。

図5では信頼感尺度項目の回答は原点の上側に否定的回答が、下側に肯定的回答が、それぞれま



とまとめて布置している。原点の上側に「1人以下」と「2～3人」, 下側に「4～9人」と「10人以上」が布置している。この図の関連項目の布置をクラスター別にまとめると表5のようになる。

表5

	人数	性別	年齢	学歴	社会階層	結婚の有無
高信頼感クラスター	4～9人と10人以上	女性	40-59, 60+	小・中, 高校	中, 中の上	既婚
低信頼感クラスター	1人以下, 2～3人	男性	18-39	大学	中の下	未婚その他

この表から〈高信頼感〉は、「個人的に親しくよく話をしたり連絡を取り合える人」は4人以上で、女性、中・高年層、低・中学歴、中流以上、既婚者に多くみられ、〈低信頼感〉は、「個人的に親しくよく話をしたり連絡を取り合える人」は3人以下で、男性、若年層、高学歴、中流未満、未婚その他に多くみられる。

この結果も、パットナム (Putnam 2000) の主張「実際すべての社会では、もっている者 (haves) はもっていない者 (have-nots) より信頼感が高い」を支持する。

6. 信頼感とインターネット利用

信頼感とインターネット利用との関連については、そのコミュニケーションでは信頼関係は醸成されないと指摘されてきたが (Kraut et al. 1996; Pew Internet and American Life Project 2000; Cummings et al. 2002; Thompson & Nadler 2002; Nie et al. 2002; Garrido & Marina 2008), 醸成が可能とする研究結果もある (Parks & Roberts 1998; McKenna & Bargh 1999; Wellman et al. 2001; Katz et al. 2001; Kavanaugh & Patterson 2001; Bargh & McKenna 2004; Pettit 2004)。この関連性について検証するため次の問9が分析に用いられた。

問9 あなたにとって、メールやメッセージ (LINE など) のやりとりは、他人との信頼関係を築く上でどの程度役に立っていると思いますか。

次の中からあてはまる番号に1つだけ○をつけてください。

	%	N
1 かなり役に立っている	21.2	193
2 まあまあ役に立っている	56.8	518
3 あまり役に立っていない	15.5	141
4 まったく役に立っていない	6.6	60
	100.0	912

回答項目4「まったく役に立っていない」は6.6%と他の回答割合と比べてかなり少ないので、(少ない割合の分析については、Le Roux & Rounanet 2010: 38を参照)、回答項目1と2を、そして3と4をそれぞれ合体し、「役に立っている」と「役に立っていない」として分析を行った。分析結果を布置図6に示す。

図6では信頼感尺度項目の回答は原点の上側に否定的回答が、下側に肯定的回答が、それぞれ布置している。原点の下側に「役に立っている」が、上側に「役に立っていない」が布置している。この図の関連項目の布置をクラスター別にとまとめると表6のようになる。

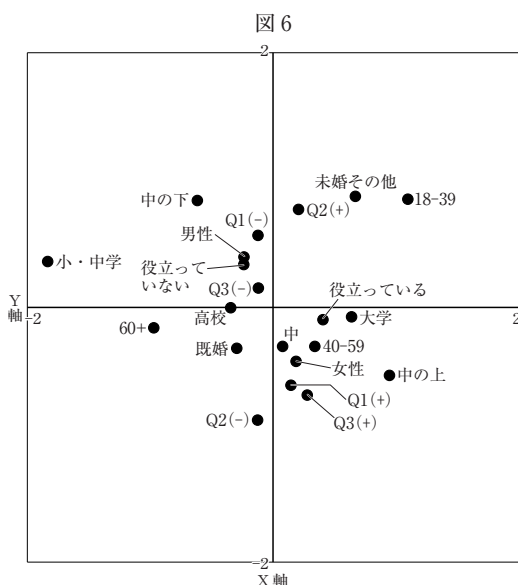


表6

	役立の有無	性別	年齢	学歴	社会階層	結婚の有無
高信頼感クラスター	役に立っている	女性	40-59, 60+	高校, 大学	中, 中の上	既婚
低信頼感クラスター	役に立っていない	男性	18-39	小・中学校	中の下	未婚その他

この表から〈高信頼感〉は、「メールやメッセージ (LINE など) のやりとりは、他人との信頼関係を築く上で役に立っている」と思い、女性、中・高年層、高学歴、中流以上、既婚者に多くみられ、〈低信頼感〉は、「役に立っていない」と思い、男性、若年層、低・中学歴、中流未満、未婚その他に多くみられることが読み取れる。

前出のチュニース (Tonnie 1887) の主張「信頼の醸成は人々の強固な、対面によるゲマインシャフト的な関係を持つことによつてのみ可能である」に対して、今後予想されるコロナウイルス禍以降の社会におけるインターネットなどによる非対面式コミュニケーションの増加が人々の信頼感に変化をもたらすか興味深い。

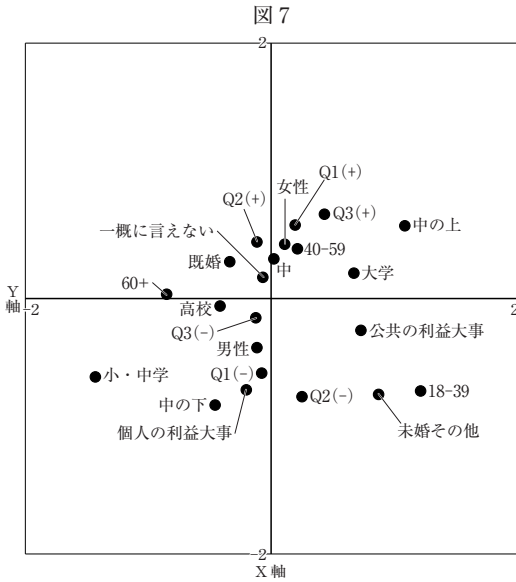
7. 信頼感と個人対公共の利益

問10 あなたは、今後、日本人は個人の利益よりも、公共の利益を大切にすべきだと思いますか。それとも、公共の利益よりも、個人個人の利益を大切にすべきだと思いますか。次の中からあてはまる番号に1つだけ○をつけてください。

	%	N
1 個人の利益よりも公共の利益を大切にすべきだ	9.7	111
2 公共の利益よりも個人個人の利益を大切にすべきだ	13.1	150
3 一概に言えない	76.3	874
4 その他 (具体的に)	0.9	10
	100.0	1,145

分析結果を布置図7に示す。

図7では信頼感尺度項目の回答は原点の上側に肯定的回答が、下側に否定的回答が、それぞれ布



置している。また「一概に言えない」は原点の上側に、「公共の利益を大切にすべき」と「個人個人の利益を大切にすべき」は下側に布置している。この図の関連項目の布置をクラスター別にとまとめると表7ようになる。

表7

	個人か公共の利益	性別	年齢	学歴	社会階層	結婚の有無
高信頼感クラスター	一概に言えない	女性	40-59, 60+	大学	中, 中の上	既婚
低信頼感クラスター	個人個人の利益 公共の利益	男性	18-39	小・中, 高校	中の下	未婚その他

この表から〈高信頼感〉は、日本人は個人か公共いずれかの利益を大切にすべきかについては、「一概に言えない」として、女性、中・高年層、高学歴、中流以上、既婚者に多くみられ、〈低信頼感〉は、「日本人は個人と公共のいずれの利益も大切にすべき」として、男性、若年層、低・中学歴、中流未満、未婚その他に多くみられることが読み取れる。

8. 信頼感と地域の付き合い方

信頼感の根底に、カーソンとギウスタ (Casson & Giusta 2006) は6つの義務が存在すると述べている。それらは、習慣的義務、約束的義務、相互的義務、顧慮的義務、同情的義務、利他的義務である。

その中でも分析に用いた次の問11のAの意見は利他的義務、そしてBの意見は相互的義務に近いとみることができる。

問11 望ましい地域の付き合い方について、次の意見のうち、あなたはどちらに近いですか。近いほうのお考えの番号に1つだけ○をつけてください。

- A 「住民すべての間で困ったときに互いに助け合う」
- B 「気の合う住民の間で困ったときに助け合う」

	%	N
1 Aの意見に近い	66.3	754
2 Bの意見に近い	31.1	354
3 その他 (具体的に)	2.6	30
	100.0	1,138

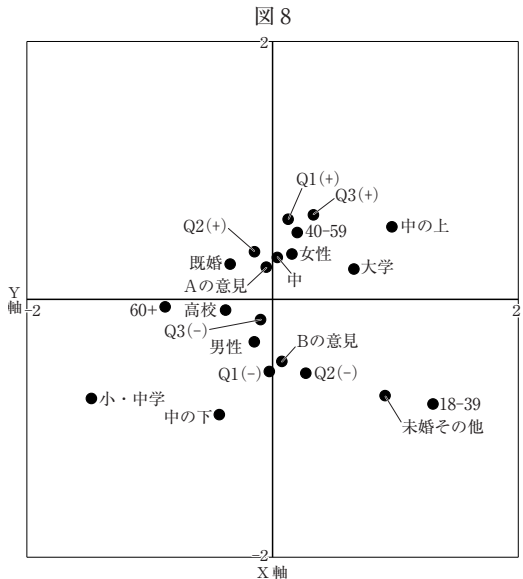


図8では信頼感尺度項目の回答は原点の上側に肯定的回答が、下側に否定的回答が、それぞれ布置している。「Aの意見に近い」は原点の左側に、「Bの意見に近い」は右側に布置している。この図の関連項目の布置をクラスター別にまとめると表8のようになる。

表8

	義務	性別	年齢	学歴	社会階層	結婚の有無
高信頼感クラスター	利他的	女性	40-59	大学	中, 中の上	既婚
低信頼感クラスター	相互的	男性	60+, 18-39	小・中, 高校	中の下	未婚その他

この表から〈高信頼感〉は、「利他的義務」に近く、女性、中年層、高学歴、中流以上、既婚者に多くみられ、〈低信頼感〉は、「相互的義務」に近く、男性、若・高年層、低・中学歴、中流未満、未婚その他に多くみられることが読み取れる。

9. 信頼感と外国人の居住

問12 近所に外国人が住むことについて、あなたはどのようにお考えですか。次の中であてはまる番号に1つだけ○をつけてください。

	%	N
1 好ましい	13.6	155
2 どちらかといえば好ましい	46.0	524
3 どちらかといえば好ましくない	36.5	415
4 好ましくない	3.9	44
	100.0	1,138

分析結果を布置図9に示す。

図9では信頼感尺度項目の回答は原点の上側に肯定的回答が、下側に否定的回答が、それぞれ布置している。「好ましい」が原点の右側に、「好ましくない」は左側に布置している。

この図の関連項目の布置をクラスター別にまとめると表9のようになる。

この表から〈高信頼感〉は、「近所に外国人が住むことは好ましい」と考え、女性、中・高年層、高学歴、中流以上、既婚者に多くみられ、〈低信頼

図9

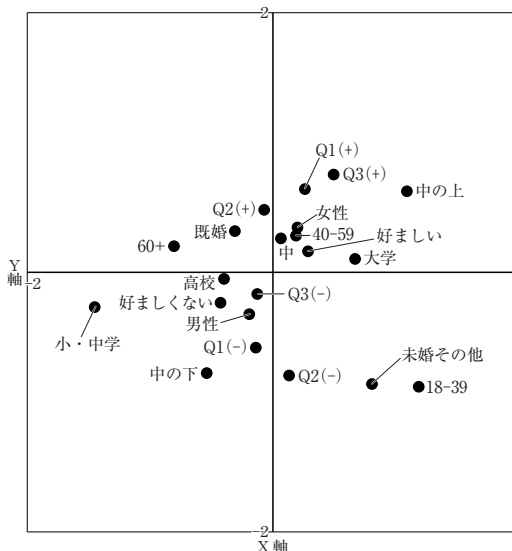


表9

	近所に外国人の居住の是非	性別	年齢	学歴	社会階層	結婚の有無
高信頼感クラスター	好ましい	女性	40-59, 60+	大学	中, 中の上	既婚
低信頼感クラスター	好ましくない	男性	18-39	小, 中, 高校	中の下	未婚その他

感)は、「近所に外国人が住むことは好ましくない」と考え、男性、若年層、低と中学歴、中流未満、未婚その他に多くみられることが読み取れる。

おわりに——要約と結論

信頼感は人々の価値観および行動とどのように関連しているかについて、ミクロレベルの視点から検証を行うため、我々は2017年に全国規模の一般意識調査を実施した。本研究ではその調査データを使用しコレスポネンス分析を行った。分析には、信頼感に関連すると思われる価値観および行動に社会的属性として性別、年齢、学歴、社会階層、結婚の有無を加えた。その結果、〈高信頼感〉と9項目の関連については、1)今の生活に満足である、2)自分自身や家族のことで、不安を感

じていることは、病気など健康の問題である、3) 悩み事の相談相手は、配偶者やパートナーと母親である、4) 物質・精神面でサポートしてくれたり対面・非対面コミュニケーションできる人が周りにいる、5) 同居のご家族以外で、個人的に親しく、よく話をしたり連絡を取り合ったりする人は4人以上いる、6) メールやメッセージ (LINE など) のやりとりは、他人との信頼関係を築く上で役立っていると思う、7) 今後、日本人は個人の利益と公共の利益のいずれを大切にすべきかは、一概に言えない、8) 地域の付き合い方としては、住民すべての間で困ったときに互いに助け合う意見に近い、9) 近所に外国人が住むことについては、好ましい、ということが明らかとなった。〈低信頼感〉と9項目の関連については、1) 今の生活に不満足である、2) 自分自身や家族のことで、不安を感じていることは、年金など老後の経済問題と収入減など家計の問題である、3) 悩み事の相談相手は、兄弟姉妹、子供、友人・知人である、4) 物質・精神面でサポートしてくれたり、対面・非対面コミュニケーションできる人が周りにいない、5) 同居のご家族以外で、個人的に親しく、よく話をしたり連絡を取り合ったりする人は3人以下である、6) メールやメッセージ (LINE など) のやりとりは、他人との信頼関係を築く上で役立っていないと思う、7) 今後、日本人は個人の利益と公共の利益のいずれを大切にすべきかは、個人の利益と公共の利益の両方を大切にすべきである、8) 地域の付き合い方としては、「気の合う住民の間で困ったときに助け合う」意見に近い、9) 近所に外国人が住むことについては、好ましくない、という結果になった。

本研究結果をまとめる。1) 〈高信頼感〉の人は、楽観的、寛容的、博愛的、利他的、社交的、そして相互協力を重視する。また対人関係においては積極的である。社会的属性との関連では、女性、既婚を除いては、概ね中高年層、高学歴、中間以上の社会階層に多くみられ、〈低信頼感〉は、男性、未婚その他を除いては、概ね若年層、低・中

学歴、中間未満の社会階層に多くみられる。また、〈高信頼感〉と高学歴、高い社会階層、既婚との関連については、先行研究が支持された。しかし、〈高信頼感〉は男性に、〈低信頼感〉は女性に多くみられるとした先行研究は支持されなかった。2) 〈高信頼感〉の人と〈低信頼感〉の人とでは、9項目すべてにおいて相違がみられた。3) 信頼感と社会的属性の関連において、〈高信頼感〉に関連する社会的属性と〈低信頼感〉に関連する社会的属性が固定されすべての項目において一貫した傾向がみられた。4) 世界価値観調査とアメリカの一般社会調査 (GSS) で明らかになった「信頼は社会の中の勝者に関連している」およびバットナムの「実際にすべての社会では、もっている者 (haves) はもっていない者 (have-nots) より信頼感が高い」は本研究でも支持された。

今後は国際比較研究によって信頼感についてのミクロレベルとマクロレベルの関連、特に国家間で異なる諸要素が個人の信頼感とどのように関連しているかを解明する研究の進展を期待する。

謝辞 本研究は、日本学術振興会科学研究費 (基盤 (B) 「情報化社会における「信頼感」の実証的研究」 (2017年度~2020年度) 研究代表: 佐々木正道) の助成により行われた。ここに感謝の意を表したい。

- 1) 例としては、離婚 (Rahn & Yoon 2009) やゲゼルシャフト的都市は信頼感を弱める研究 (Paxton 2007) などがある。
- 2) 不信感に関する性格特性は、冷笑的で厭世的であり、人々の社会的・政治的相互協力の可能性に悲観的である (Whiteley 1999; Uslander 2002; Delhey & Newton 2003; Freitag 2003)。
- 3) 社会化による信頼の醸成については、Rotenberg (1995, 2010) が詳細な研究を行っている。
- 4) 世界価値観調査 (World Values Survey) では、信頼の尺度としては1問だけ用いられている。また、一般社会調査 (The General Social Survey) では、2問、そしてヨーロッパ社会調査 (The European Social Survey) では3問が用いられている。

- 5) アーミスチュ他 (Ermisch et al. 2009: 750) によると問い「あなたは、たいていの人には信頼できると思いますか、それとも、用心するにこしたことはないと思いますか。」が、信頼感の経済効果について関連した約 500 の論文などで用いられている (Sapienza et al. 2013 を参照)。
- 6) 改訂版として、*IASSIT Quarterly* 12(4): 18-24, 1988 がある。

引用・参考文献

- Alesina, A. & la Ferrara, E. (2000). Who trust others? *Journal of Public Economics*, 85, 207-234.
- Alesina, A. & la Ferrara, E. (2002). Participation in heterogeneous communities. *Quarterly Journal of Economics*, 115, 847-904.
- Allport, G. (1961). *Pattern and Growth in Personality*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Barbar, B. (1983). *The Logic and Limits of Trust*. New Brunswick, N. J.: Rutgers University Press.
- Bargh, J. & McKenna, K. (2004). The Internet and social life. *Annual Review of Psychology*, 55, 573-90.
- Bjornskov, C. (2003). The happy few: Cross-country evidence on social capital and life satisfaction. *Kyklos*, 56, 141-169.
- Bjornskov, C. (2006). Determinants of generalized trust: A cross-country comparison. *Public Choice*, 130, 1-21.
- Blau, P. M. (1964). *Exchange and Power in Social Life*. New York: Wiley.
- Booth, J. & Richard, P. (2001). Civil society and political context in central America. In B. Edwards, M. Foley & M. Diani (Eds.), *Beyond Tocqueville: Civil Society and the Social Capital Debate in Comparative Perspective* (pp. 43-55). Hanover, NH: Tufts University Press.
- Boyle, R. & Bonacich, P. (1970). The Development and trust and mistrust in mixed motive games. *Sociometry*, 33, 123-239.
- Brehm, J. & Rahn, W. (1997). Individual-level evidence for the causes and consequences of social capital. *American Journal of Political Science*, 41, 999-1023.
- Casson, M. & Giusta, M. (2006). The economics of trust. In R. Bachmann & A. Zaheer (Eds.), *Handbook of Trust Research* (pp. 332-354). Cheltenham, UK: Edward Elgar.
- Cattell, R. B. (1965). *The Scientific Analysis of Personality*. Baltimore: Penguin Books.
- Coleman, J. (1988). Social capital in the creation of human capital. *American Journal of Sociology*, 94, 95-120.
- Cummings, J. N., Butler, B. & Kraut, R. (2002). The quality of online social relationships. *Communications of the ACM*, 47(7), 103-108.
- Delhey, J. & Newton, K. (2003). Who trusts: The origins of social trust in seven nations. *European Societies*, 5, 93-137.
- Delhey, J. & Newton, K. (2005). Predicting cross-national levels of social trust: Global pattern on Nordic exceptionalism? *European Sociological Review*, 21, 311-327.
- Dietz, G., Gillespie, N. & Chao, G. (2010). Unraveling the complexities of trust and culture. In Mark N. K. Saunders, D. Skinner, G. Dietz, N. Gillespie, & R. Lewicki (Eds.), *Organizational Trust: A Cultural Perspective* (pp. 3-41). Cambridge UK: Cambridge University Press.
- Erikson, E. (1950). *Childhood and Society*. New York: W. W. Norton.
- Ermisch, J., Gambetta, D., Laurie, H., Siedler, T. & Uhrig, S. (2009). Measuring people's trust. *Journal of the Royal Statistical Society Series. A*, 172, 749-760.
- Freitag, M. (2003). Beyond Tocqueville: The origins of social capital in Switzerland. *European Sociological Review*, 19, 217-232.
- Fukuyama, F. (1995). *Trust: The Social Virtues and the Creation of Prosperity*. New York: Free Press.
- Gargiulo, M. & Ertug, G. (2006). The dark side of trust. In R. Bachmann & A. Zaheer (Eds.), *Handbook of Trust Research* (pp. 165-186). Cheltenham, UK: Edward Elgar.
- Garrido, N. & Marina, A. (2008). Exploring trust on Internet: The Spanish case. *Observatorio (OBS) Journal*, 2(3), 223-244.
- Glaeser, E., Laibson, D., Scheinkman, J. & Scoutter, C. (2000). Measuring trust. *Quarterly Journal of Economics*, 117, 1193-1230.
- Golembiewski, R. T. & McConkie, M. (1975). The centrality of interpersonal trust in group processes. In C. Cooper (Ed.), *Theories of Group Processes* (pp. 131-185). New York: Wiley.

- Greenacre, M. (2004). Correspondence analysis. In M. Lewis-beck, A. Bryman & T.F. Liao (Eds.), *Encyclopedia of Social Research Methods* (pp.203–205). Thousand Oaks, California: Sage.
- Greenacre, M. & Blasius, G. (Eds.). (1994). *Correspondence Analysis in the Social Sciences*. London: Academic Press.
- Hardin, R. (1996). Trustworthiness. *Ethics*, 107, 26–42.
- Hardin, R. (2002). *Trust and Trustworthiness*. New York: Russell Sage Foundation.
- Hardin, R. (2006). *Trust*. Cambridge, UK: Polity.
- Hearn, F. (1997). *Moral Order and Social Disorder: The American Search for Civil Society*. New York: Aldine de Gruyter.
- Helliwell, J. F. (2003). How's life? combining individual and national variables to explain subjective well-being. *Economic Modelling*, 20, 331–360.
- House, J. & Wulf, S. (1978). Effects of urban residence on interpersonal trust and helping behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 1029–43.
- Katz, J. E., Rice, R. E. & Aspden, P. (2001). The Internet, 1995–2000: Access, civic involvement, and social interaction. *American Behavioral Scientist*, 45(3), 405–19.
- Kavanaugh, A. L. & Patterson, C. J. (2001). The impact of community computer networks on social capital and community involvement. *American Behavioral Scientist*, 45(3), 496–509.
- Kraut, R. E., Scherlis, W., Mukhopadhyay, T., Manning, J. & Kiesler, S. (1996). The home net field trial of residential Internet services. *Communications of the ACM*, 39(12), 55–63.
- La Porta, R., Lopez-de-Silanes, F., Shleifer, A. & Vishny, R. W. (1997). Trust in large organizations. *American Economic Review*, 87, 333–338.
- Le Roux, B. & Rounanet, H. (2010). *Multiple Correspondence Analysis*, Thousand Oaks, California: Sage.
- Levi, M. & Stoker, L. (2000). Political trust and trustworthiness. *Annual Review of Political Science*, 3, 475–508.
- Luhmann, N. (1979). *Trust and Power*. New York: John Wiley and Sons.
- McKenna, K. Y. A. & Bargh, J. A. (1999). Causes and consequences of social interaction on the Internet: A Conceptual framework. *Media Psychology*, 1(3), 249–269.
- Miller, A. S. & Mitamura, T. (2003). Are surveys on trust trustworthy? *Social Psychological Quarterly*, 66(1), 62–70.
- Misztal, B. A. (1996). *Trust in Modern Societies*. Oxford, UK: Blackwell.
- Newton, K. (1999). Social and political trust in established democracies. In P. Norris (Ed.), *Critical Citizens* (pp. 169–187). New York: Oxford University Press.
- Nie, N. H., Hillygus, D. S. & Erbring, L. (2002). Internet use, interpersonal relations, and sociability: A time diary study. In B. Wellman & C. Haythornthwaite (Eds.), *The Internet in Everyday Life* (pp. 215–243). Malden, MA: Blackwell.
- Nooteboom, B. (2002). *Trust*. Cheltenham, UK: Edward Edgar.
- Orren, G. (1997). Fall from grace: The public's loss of faith in government. In J. S. Nye, P. D. Zelikow & D.C. King (Eds.), *Why Americans Mistrust Government* (pp. 77–107). Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Parks, M. & Roberts, L. (1998). Making MOOsic: the development of personal relationships on-line and a comparison to their off-line counterparts. *Journal of Social and Personal Relationships*, 15(4), 517–537.
- Patterson, O. (1999). Liberty against the democratic state: On the historical and contemporary sources of American distrust. In M.E. Warren (Ed.), *Democracy and Trust* (pp. 151–207). Cambridge: Cambridge University Press.
- Paxton, P. (1999). Is social capital declining in the United States? a multiple indicator assessment. *American Journal of Sociology*, 105, 88–127.
- Paxton, P. (2002). Social capital and democracy: An inter-dependent relationship. *American Sociological Review*, 67, 254–277.
- Paxton, P. (2007). Association memberships and generalized trust: A multilevel model across 31 countries. *Social Forces*, 86, 47–76.
- Pettit, P. (2004). Trust, reliance and the Internet. *Analyse & Kritik*, 26(1), 108–121.
- Pew Internet and American Life Project. (2000). *Tracking online life: how women use the Internet to cultivate relationships with family and friends*. Available online

- at <http://www.pewinternet.org/reports/>
- Portes, A. (1998). Social capital: Its origins and applications in modern sociology. *Annual Review of Sociology*, 24, 1-24.
- Putnam, R. (1993). *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Putnam, R. (2000). *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*. New York: Simon & Schuster.
- Rahn, W. & Yoon, K. (2009). Geographies of trust. *American Behavioral Scientist*, 52, 1646-1663.
- Realo, A., Allik, J. & Greenfield, B. (2008). Radius of trust: Social capital in relation to familism and institutional collectivism. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 39, 447-462.
- Reeskens, T. & Hooghe, M. (2008). Cross-cultural measurement equivalence of generalized trust: Evidence from the European social survey (2002 and 2004). *Social Indicators Research*, 85, 515-532.
- Rosenberg, M. (1956). Misanthropy and political ideology. *American Sociological Review*, 21, 690-695.
- Rosenberg, M. (1957). Misanthropy and attitudes towards international affairs. *Journal of conflict resolution*, 1, 340-345.
- Rotenberg, K. (1995). The socialization: Parents' and children's interpersonal trust. *International Journal of Behavioral Development*, 1, 713-726.
- Rotenberg, K. (2010). *Interpersonal Trust during Childhood and Adolescence*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Sapienza, P., Toldra-Simats, A. & Zingales, L. (2013). Understanding trust. *The Economic Journal Online*: 3 June 2013.
- Sasaki, M. & Marsh, R. (Eds.). (2012). *Trust: Comparative Perspectives*. Leiden, Holland and Boston, MA.: Brill.
- Sasaki, M. (Eds.). (2019). *Trust in Contemporary Society*. Leiden, Holland and Boston, MA.: Brill.
- Schwarz, N. (1999). Self-reports: How the questions shape the answers. *American Psychologist*, 54, 93-105.
- Simmel, G. (1950). *The Sociology of Georg Simmel*, translated and edited by Kurt H. Wolff, Glencoe, Ill.: The Free Press.
- Smith, T. (1988). The ups and downs of cross-national survey research. *GSS Cross-National Report No. 8*. Chicago: National Opinion Research Center. University of Chicago.
- Stolle, D. (2001). Clubs and congregations: The benefits of joining an association. In K. Cook (Ed.), *Trust in Society* (pp. 202-244). New York: Russell Sage Foundation.
- Stolle, D., Soroka, S. & Johnston, R. (2008). When does diversity erode trust? Neighborhood diversity, interpersonal trust and the mediating effect of social interactions. *Political Studies*, 56, 57-75.
- Thompson, L. & Nadler, J. (2002). Negotiating via Information technology: Theory and application. *Journal of Social Issues*, 58(1), 109-124.
- Tönnies, F. (1963 [1887]). *Gemeinschaft und Gesellschaft*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Uslaner, E. (1999). Democracy and social capital. In M. Warren (Ed.), *Democracy and Trust*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Uslaner, E. (2000). Producing and consuming trust. *Political Science Quarterly*, 115, 569-590.
- Uslaner, E. (2002). *The Moral Foundations of Trust*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Weatherford, S. (1992). Measuring political legitimacy. *American Political Science Review*, 86, 149-166.
- Welch, M., Rivera, R., Conway, B., Yonkoski, J., Lupton, P. & Giancola, R. (2005). Determinants and consequences of social trust. *Sociological Inquiry*, 75, 453-473.
- Welch, M., Sikkink, D. & Loveland, M. T. (2007). The radius of trust: Religion, social embeddedness and trust in strangers. *Social Forces*, 86, 23-46.
- Wellman, B., Haase, A. Q., Witte, J. & Hampton, K. (2001). Does the Internet increase, decrease, or supplement social capital? *American Behavioral Scientist*, 45(3), 436-455.
- Whiteley, P. (1999). The origins of social capital. In J. W. van Deth, K. Newton & M. Maraffi (Eds.), *Social capital and European democracy* (pp. 25-44). London: Routledge.
- Wilkes, R. (2011). Re-thinking the decline in trust: A comparison of black and white Americans. *Social Science Research*, 40(6), 1596-1610.
- Yamagishi, T., Kikuchi, M. & Kosugi, M. (1999). Trust, gullibility, and social intelligence. *Asian Journal of*

Social Psychology, 2, 145-161.

Yoshino, R. (2015). Trust of nations. *Behaviormetrika*, 42, 131-166.

Zmeril, S. & Newton, K. (2008). Social trust and attitudes towards democracy. *Public Opinion Quarterly*, 77, 706-724.